

中国語処置文“把”構文の教授方法に関する考察

張 文青

アブストラクト

“把”構文は、中国語に特徴的な構文の一つであり、外国人学習者にとって習得が難しいと言われている。本稿では、先行研究を踏まえ、“把”構文の構造的特徴、プロトタイプ（原型）認知モデル、使用条件、使用できない場合及び使用時の注意点などを示し、例文や誤用例を数多く挙げることで、詳しく説明することを試みた。また、この構文と「鏡像関係」にある“被”構文の構造的特徴、“把”構文との書き換え例も取り上げた。さらに、本学の中国語クラスにおいて、“把”構文の習得調査を行い、“把”構文についての詳しい説明を受けてから練習問題を行ったクラス（Ⅲレベル）と説明を受けずに練習問題を行ったクラス（Ⅳレベル）の回答結果を比較し、誤った回答の原因を考察した。そしてそれを踏まえ、中国語教育において、“把”構文を初、中、上級の三段階に分けて導入することと、その教授方法についての提案を試みた。

キーワード：“把”構文の特徴、プロトタイプ認知モデル、使用条件、学生の習得状況、“把”構文の教授方法

1. はじめに

物事は話者が描こうとする角度によって、表現の意味合いや形式が異なる。動作主と動作対象（動作の受け手）といった立場の違う二者がいる場合、どちらの立場に立って述べるかによって表現の形式や構造が変化するのである。本論は、中国語に特徴的ないくつかの構文（例えば、一般能動文や受身文など）の中でもっとも高い他動性を有する構文（張伯江 2000）である“把”構文を取り上げる。

古川(2008:165-170)によれば、物事を動作行為の主体（動作主や送り手、中国語：施事者）の立場から述べる文は能動態といい、動作行為の受け手（中国語：受事者）の立場から述べる文は受動態という。

「能動文」は状態変化が動作主によって意図的に引き起こされたものであることを表わし、いわば、時間軸に沿って、他動的事態を客観的に記述するのに対して、“把”構文は話者の主観的な理解が介在する因果関係の記述に使われ、動作対象の変化と動作後の状態を際立たせる構文形式であると言える（古川 2008:165-170）。

殆どの“把”構文は、“受動者主語文”であり、いわゆる、動作主と“把”を取り除いた後も、残りの部分が依然として成立し、動作主が省略されうるという形式的特徴を有する。また、それらが省略された後に残る部分は“受動者主語文”を形成し、動作の対象がどのような状況になったかという事態を表現することができる（朱徳熙 1995:p. 253-255）。

“把”構文とそれによって変化した“受動者主語文”の表現の違いは中国語でどのように述べられるのだろうか。本論では、話者の立場や表現上の意味合いがどのように異なるかを、例を上げて説明する。

まず、“把”構文の構造やプロトタイプ（原型）の特徴、“把”を使用する条件、使う際の注意点、使用する場合としない場合の差異、絶対に使用できない場合に関して述べる。次に、“把”構文と、その「鏡像関係」にある受身文“被”構文の構造や特徴の違いを取り上げ、動作主と動作対象が主語になった場合の言語記述の意味的变化を分析する。最後に、学生の習得状況に関する調査結果を報告するとともに、教育現場での“把”構文の扱い方に関する提案を行いたい。今後の中国語教育の改善に繋がれば、幸甚に思う。

2. “把”構文の特徴

2.1 “把”構文の特徴とプロトタイプの認知モデル

先行研究では“把”構文が異なる角度からさまざまに区分されている。呂文華(1994)は語意の観点から、1. 位置の移動或いは関係の転換、2. 動作対象に変化を生じさせ、新しい結果をもたらす、3. 認める、見なす、4. 不如意、5. ～を

してしまう、の5つに分類している。太田(1958)は構造と機能の観点から、1. 見なす、充たす、2. 比較、比喩、3、変化させる、4. 命名、5. 二つの目的語をもつ、6. 一般的処置文、の6つに分類している(王占華 2010: 91)。

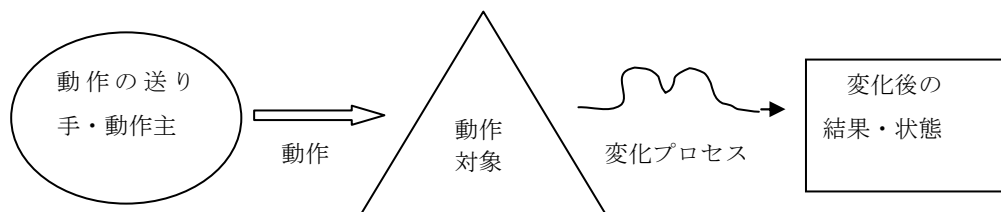
“把”はもともと“拿”(もつ;つかむ)を意味する動詞であったが、現代語では、動作や行為の受け手を導く介詞(前置詞)として用いられるようになった。“把”のもつ文法的意味は、まず第一に、人あるいは事物に対する「処置」を表すことである。“把”の後ろにつづく賓語(目的語)は「処置」される対象である。動作・行為の送り手である行為者が、受け手である対象物をどうしたのか、どんな処置をしたのかを述べるのが“把”構文であると言える。従って、このような文は「処置文」と称されている。

中国語の「処置文」は、動作主の働きかけによって特定される対象物に生じた状態的あるいは位置・場所的变化を表わすところに特徴がある。このような中国語の「処置文」は、特定される対象物と規定される動作・行為の因果連鎖と変化の結果を「有標な形式」“把”を使って表現するもので、特徴的な中国語表現の一つとなっている。“把”の代わりに、書き言葉や方言では、“将”が使われることもあるが、これは近世語の名残りである。

「規定される動作・行為」は以下のように特定される。まず、“把”構文の動詞は制限のかかった他動詞でなければならない。さらに、この他動詞は“把”の目的語を意味的に支配できるものでなければならない。前述したように、“把”を用いた処置文は、動作の対象に何らかの動作をかける。そして、それが「処置」となり、受け手である対象に影響を及ぼし、変化を生じさせる。動詞とその後に生じた因果連鎖(動作の結果や時態、場所、時量、状態変化)には必然性があるものとなないものがある。いわゆる、動作主の意図的行為と非意図的行為による二つの他動的事態が考えられ、処置文の拡張的意味をも併せ持っている。

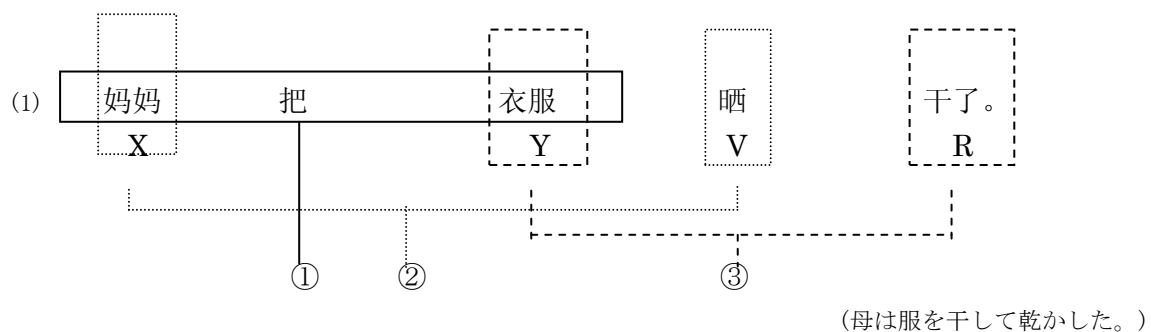
認知言語学的観点から(姚艷玲 2007)、“把”構文のプロトタイプ的例、いわゆる意図的行為による動作と動作の受け手の状態的、性質的变化パターンに関し、下記のような認知モデルを示すことができる(姚艷玲 2007: 515)

図2-1 典型的な“把”構文認知モデル



この認知パターンは、動作主がある手段によってある行為を行った結果、ある対象に状態変化が引き起こされるといえるものである。矢印は、変化を引き起こす存在の力の推移を示し、波線の矢印は対象の変化のプロセスを示し、四角は対象に何らかの変化が起こった後の状態を示している。

構文の文法的構造は下記のように示すことができる。



動作主 + 把 + 動作対象 + 動作・行為 + 結果・状態・場所の変化
 主語 + 把 + 目的語 + 述語 + 結果補語/方向補語/動詞の重ね型/場所/了 など

「衣服→干了（服→乾く）」という状態変化は「妈妈—晒（母—干す）」という能動的な行為によって直接的に引き起こされ、「妈妈（母親）」はこのような状態変化を引き起こす「動作主」である。両者の因果関係は、原型的な統語構造にまとめることができる：X 把 Y V R

①の段階では「妈妈（母親）」は「衣服（服）」を“支配下”に入れる。「支配・処理」できるものは発話者と聞き手がともに捕捉している、「例の・・・；その・・・」と特定されるものに限られる。

②の段階で「妈妈（母親）」は「晒（干す）」という行為を行う。ここでは述語動詞として、動作の受け手（目的語）に何らかの状態変化を引き起こさないような、静的な状態動詞（是、像、有、姓、属于など）は、使えない（2.3.2 参照）。“把”構文に使える動詞は、何らかの処置を表すものに限られるということである。

③の段階で「衣服（服）」が「干了（乾いた）」という結果が示されている。「晒（干す）」の結果補語である「干（乾く）」は必然的結果、意図的行為の結果であり、「衣服（服）」の上に生じた結果状態を表している。

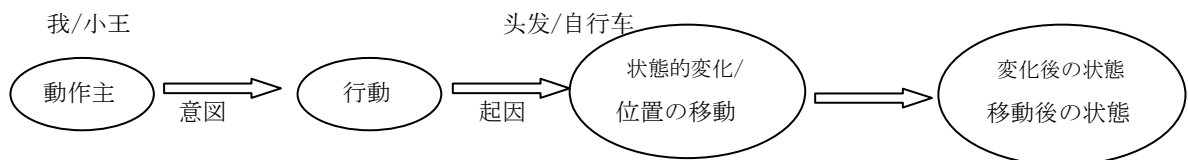
①+②+③の三段階をあわせ、動作の送り手が、自らの“支配下”に入れたモノに対して、意図的な動作行為・処理（原型的例では）を加え、そのモノに生じる結果状態を表す文型となる。

さらにプロトタイプ例の(2)、(3)と非意図的動作による因果連鎖例の(4)、(5)の因果関係を分析すると、下記のような因果連鎖モデルを示すことができる(図 2-2 参照)。

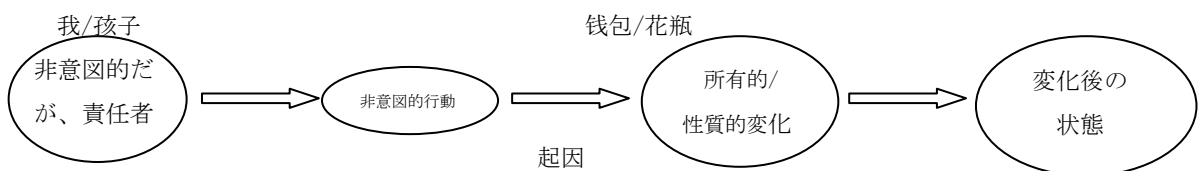
- (2) 我把头发剪短了。(私は髪の毛を短く切った。)
- (3) 小王把自行车给朋友了。(王さんは自転車を友人にあげた。)
- (4) 我把钱包弄丢了。(私は財布をなくしてしまった。)
- (5) 孩子把花瓶打了。(子供は花瓶を割った。話し言葉ではふつう「孩子把花瓶给打了。」となる。)

図 2-2 “把”構文の因果連鎖認知モデル

(1) 意図的動作による因果連鎖



(2) 非意図的動作による因果連鎖



上例のように、動作主の動作や行為によって、動作受け手の状態や場所に変化を生じさせる。意図的例(2)、(3)、そして非意図的例(4)、(5)は共に「処置」を経て、変化後の結果と状態を表す。この状態、位置、または性質の変化は変化他動詞（上記例：「剪、給、弄」）の語彙的意味に含意され、その後の結果や状態変化を表す「短、了、丢」とは因果関係にあり、動作結果に関してある種の必然性を表している。“把”構文に使える動詞は結果や状態的变化が表せる動詞でなければならない。静態的動詞や自動詞、心理活動や感覚を表す動詞や方向を表す動詞は“把”構文に使えないこと

に注意する必要がある。

2.2 “把”構文を使用する条件

“把”構文はどのような状況やどのような場面、思考方式、表現方法において使われるのか。このことを学習者に明確に理解させることで、“把”構文を応用する能力を高めることができると筆者は考えている。本学の中国語クラスには、日本人学習者が多いため、同様に高い他動性を有する日本語の変化他動詞文の構文（日本語では、動作主の働きかけによって対象物に状態的あるいは位置的变化が生じるという基本的的事象的变化を表すには、典型的他動詞を述語とする変化他動詞構文が用いられる）と中国語の“把”構文の構造的違いや表現形式の違いを対照しながら説明すれば、日本人学習者にとって理解、応用がしやすくなり、中国語文法の難関である“把”構文の教授に役に立つと考える（王占華 2010：96）。

2.2.1 動作対象の処置方法を強調する場合—「SはOをV(了)」

動作主によって新たにもたらされた状況を強調し、動作対象はどう変化したのか、動作主は動作対象をどう「処置」したのかを強調して表現する際に“把”構文が用いられる。

(6) 我把饭吃光了。(私はご飯を全部食べてしまった。)

動作主は「飯」が完全になくなってしまったという変化に表現の焦点を当てている。

(7) 毕业后, 我把自行车给学妹。(卒業した後、私は自転車を後輩にあげる。)

動作主は、卒業後「自行车」をどのように処置したいのか、その意図的行動と行動後動作の受け手である「自行车」の行く先・所有者の変化を表現するために処置文を用いている。

2.2.2 人物や事柄の位置・場所的变化を引き起こす場合—「SはOをLに移動させる」

動作主の意図的行動によって、動作対象がある場所や位置に移動させられ、場所的变化、状態的变化、所有者の変化などがもたらされることに焦点が当てられる際に用いられる。

(8) 把脏衣服放进洗衣机吧。(汚れた服を洗濯機に入れなさい。)

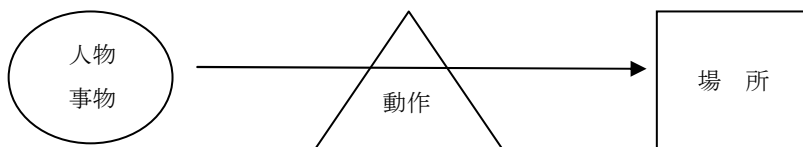
(9) 学生们把新单词记在脑子里了。(学生達は新しい単語を暗記した。)

(10) 你明天把书还给图书馆。(明日、本を図書館に返しなさい。)

このような位置・場所的变化を引き起こす文、いわゆる「SはOをLに移動させる」という内容を言い表す場合は、自動的に処置文“把”構文が使われる。このような動作主による動作対象の位置・場所的变化を引き起こす文の認知モデルは下記の図2-3で示すことができる。

例：把+動作対象+「放在/ 还给/ 送去/ 拿回/ 带进/ 写在」etc.+ 場所

図2-3 動作・処置による位置・場所的变化認知モデル



上記の例文(8、9、10)では、“把”の後の動作対象は自ら文中の他の位置に移すことができない存在なので、“把”構文しか使えない。

2.2.3 動作主が動作を通して動作対象に性質的、形態的变化を引き起こす場合—「SはOをEに変える」

(11) 哪位同学能把我说出的日语翻译成中文?

(どなたが私の言った日本語を中国語に訳してくれますか。)

(12) 学生们把中文汉字的「钱」字写成了日语汉字的「錢」。

(学生達は中国語漢字の「钱」を日本語漢字の「錢」と書いてしまった。)

(13) 清水同学把「问老师」的发音发成了「吻老师」。

(清水さんは「先生に質問する」という発音を「先生にキスする」と発音してしまった。)

例文(12)の事象構造は、動作主「学生」が、動作対象「中国語漢字の錢」を他種の漢字「日本語漢字の錢」に変化させてしまったことを表している。

この出来事における記述構造の時間的順序は、“学生→中文汉字→写成→日语汉字”である。この類の文に共通した特徴は、変化する前の動作対象の状態は動詞の前に、変化後の結果・状態は動詞の後ろに、つまり動作対象の状態変化が時間順序で動作発生(動詞)の前後に位置し、両者の位置交換ができないことである。

相原(1996)はこのような“把”構文をイメージ的にとらえ、「変身の“把”構文」と称している。また、「SはOをEに変える」ということを表す“把”構文では、動詞「弄…、…成、搞…、做…、换成、变成、弄成、做好、写成、分为」がよく用いられる。

2.2.4 ～を…と認める、見なす—「SはOをPと見なす」

(14) 我们把日本看作第二故乡。(私たちは日本を第二の故郷と見なしている。)

(15) 老夫妇把她女儿当作自己的孙女一样来照顾。(老夫婦は彼女の娘を自分の孫娘のように世話している。)

(16) 有些年轻女性把嫁给“富二代”当作荣耀之举。(ある若い女性達は新興富裕層に嫁ぐことを誇りに思っている。)

上の例文(14)のように、この種の“把”構文では、動作主体は判断の対象に対して、「認定、認める、見なす」という行為を行う。この記述構造は、「我们—日本—看作—第二故乡」であり、「我们把日本看作第二故乡。(私たちは日本を第二の故郷と見なしている。)」となる。この文は、出来事の時間的順序も忠実に反映している。

ここで注意すべき点は、「SはOをLに移動させる」、「SはOをEに変える」、「SはOをPと見なす」という必ず“把”を用いる三種の構文において、動作対象が動作の影響を受けた後の結果(場所・状態・結論)はいずれも話題の取り扱っている時間範囲内で「終端性」或いは「終結性」の特徴を有していることである。この現象は、出来事に対する記述構造の時間的順序とも合致している。したがって、“把”構文において、上記例文(14、15、16)のような「見なした結果」は文の最後に置かれ、記述構造における叙述の起点、時間的順序と文の構造が一致しているのが特徴である(張黎、佐藤晴彦 1999: 33)。

2.2.5 責任追及や自責を表現する場合

下記の例文(17~20)は“把”構文形式の一種であるが、非典型的、非原型的因果連鎖の他動詞文、いわゆる非意図的他動詞文や周辺の、拡張的他動詞文であると言われている。このような非意図的他動詞文は、動作主(参与者)の不本意により事態が変化してしまったり、不具合の事態に発展してしまったりする際の表現になる。例(20)の場合、動作主は事態変化の起因者であると同時に、これらの思わしくない事態に発展した結果及び変化を受けざるを得ない、不利益を被る被害者であるともいえるべき存在である。この場合の主体は、動作対象(目的語)に意図的に働きかけるのではなく、動作対象に生じた変化をただ単に「所有」している、またはその変化を受けざるを得ないだけの主体であると考えられている。

(17) 小王把地址写反了。(王さんは住所を反対に書いてしまった。張黎 2005)

(18) 小王把鞋洗湿了。(王さんは靴を濡らしてしまった。馬希文 1987)

(19) 他把脚都走大了。(歩いて足まで腫れてしまった。朱德熙 1995)

(20) 去年老王又把老伴儿死了。(去年王さんは連れ合いを亡くした。朱德熙 1982)

上記の例は、“把”の非典型的例、いわゆる非意図的で不本意な事態変化や受け入れざるを得ない事態を表現する周延的、拡張的他動詞構文の例である。動作主はその結果が起こることを期待していない。従って「目的性」もなければ、処置の意味もない。この類の文は、動作主が意図していないにも関わらず、消極的にもたらされた結果を表わすと考えられている。話者は、責任追及や自責の意などの消極的な態度を表述する際にこの構文を用いるのである。

2.2.6 動作を強制的に実現させる場合

この形式の“把”構文でも、動作主にとって非意図的な行動が要求されるため、“把”構文の拡張的な表現と言われている。話者が聞き手にある動作・行動を強制的に実現させようとする場合であり、命令的口調の表現が多い。したがって、聞き手は意図的に動作対象に対して行動・動作を起こして、結果や変化を求めるのではなく、動作主ではない話者に言われた通りに動作を起こすことになる。この場合、動作主は受動的に動作を行い、話者に要求された変化や結果を実現せざるを得ないような立場に立たされている。

- (21) 把饭吃完！ (ご飯を食べてしまいなさい。)
- (22) 把衣服穿好！ (服をきちんと着なさい。)
- (23) 你把这件事说清楚！ (このことをはっきり説明しなさい。)

この命令式“把”構文でも、動作主と“把”を省略した後も、残りの部分が依然として成立し、“受動者主語文”を形成する。その場合も同様に、命令的な口調で聞き手に動作の実現・達成を要求する事態を述べることになる。

2.3 “把”構文を使う際の注意点

2.3.1 述語他動詞の備えるべき条件

“把”構文の述語動詞は、まず他動詞でなければならない。さらに、その後続成分、つまり、結果や変化、状態を表す結果補語や方向補語、時態を表す「了、着」、場所、状態、動作の様子、連動文形式などを表す表現が必要不可欠となる。一般的には次のような形式になることが多い。

- ① 他動詞の後置成分には時態を表す「了、着」などを伴う
時態：他把电子邮件发走了。了。(彼はEメールを送信した。)
- ② 他動詞の後ろに結果補語を伴う
結果：姐姐把衣服叠好了。了。(姉は服をきちんと畳んだ。)
- ③ 方向補語とその後に場所名詞を伴う
場所：小王把词典放进书包里了。(王さんは辞書をカバンに入れた。)
- ④ 時量補語を伴う
時量：小王把那个人上下打量了半天。(王さんはあの人を上から下まで暫く見つめていた。)
- ⑤ 様態補語を伴う
状態：把他们冷得直发抖。(彼らは寒くてずっと震えている。)
- ⑥ 動詞を重ね形にする
動作の様子：把房间打扫打扫吧。(部屋を掃除しなさい。)
- ⑦ 連動文形式にする
連述述語：我把照相机拿去修理了。(私はカメラを修理に持って行った。)

“把”構文の動詞に上記のような条件が求められるのは、動作主による処置や動作対象に与える影響とそれに対する結果を表すためであるからに他ならない。しかし、ハダカのままの動詞でも、詩歌の中では「把门进(入り口に入る)」のように、文字数や韻を合わせるために用いられることがある(興水 1985)。

2.3.2 “把”構文に使えない動詞

動詞の中には、以下のように“把”構文に用いることができないものがいくつかある。

目的語を取らない自動詞（離合詞）

投资（投資する）	见面（会う）	毕业（卒業する）
吃惊（驚く）	随便（好き勝手に、自由に）	洗澡（お風呂に入る）

動作を表さない静態的動詞

是（～である）	有（ある、所有する）	在（存在する）
像（～のようである）	姓（～を姓とする）	属于（～に属する）

心理活動や感覚を表す動詞

知道（知っている）	相信（信じる）	希望（希望する）
觉得（感じる）	看见（目に入る）	听见（耳に入る）

処置を表さない、方向を表す動詞

上（のぼる）	下（くだる）	来（来る）	去（行く）
进（はいる）	出（出る）	离开（離れる）	接近（近づく）

2.3.3 副詞や助動詞の位置

副詞を伴う“把”構文の中では、副詞（「就、才、得、都、再、又、常常、差点儿」など）を“把”の前に置かなければならない。ただ、「再、又」は、“把”構文の述語動詞の前に置くこともできるので、注意が必要である（例 26、27 参照）。また、能願助動詞（「能、会、可以、应该、想、要、得、愿意、敢、肯」など）も同様に“把”の前に置かなければならない。

“把”構文の否定形は“把”の前に「没／没有」を加える形式で、“把”以降の部分全てを否定する。なお、否定文に「不」が使われるのは特殊な場合であり、「もし～をしなければ……」という仮定を表す時に限って「不」で否定されるのである（例 28 参照）。

(24) 我得把报告交上去才能松口气。（レポートを出してからほっと一息つける。）

(25) 咱们不能把该做的事往后拖。（我々はやるべきことを後回しにしてはいけない。）

(26) 他又把我的书弄湿了。/ 他把我的书又弄湿了。（彼はまた私の本を濡らした。）

(27) 再把课文读一遍吧。/ 把课文再读一遍吧。（スキットをもう一度読んで下さい。）

(28) 爸爸对孩子说，“你不把青椒吃了，就不能去上学！”

（父親は子供に「ピーマンを全部食べなければ、学校へ行ってはいけない」と言った。）

2.4 “把”構文を使用する文としない文の差異

“把”構文の“把”を省略しても、なお文として成立する例は少なくない。以下の例ではいずれも“把”を略すと動作対象が主語となった文、いわゆる“受事者主語文”に変わる。“把”構文と“受事者主語文”の違いは、“受事者主語文”はいわば静態を示すのに対し、“把”構文は動態を示すところにある。また、“把”構文は、動作対象の変化を強制的に実現させるという意味合いをもつ場合もある。（例 30A 参考）。

(29A) 把衣服洗干净了。（服をきれいに洗った。→服をきれいにした。）

(29B) 衣服洗干净了。（服をきれいに洗った。→服はきれいになっている。）

(30A) 把作业做完再出去玩儿。

(宿題を書き終わってから遊びに行きなさい。→宿題を終るまでしなさい。)

(30B) 作业做完再出去玩儿。(宿題が終わってから遊びに行きなさい。)

(31A) 我把面包吃了。(私はパンを食べてしまった。)

(31B) 我吃了一个面包。(私はパンを一つ食べた。)

“受事者主語文”である上記Bの例文では、主語は特定のものでなければならず、また述語動詞はハダカの動詞を用いることができないのが特徴である。(31B)は単に「私が」何を食べたのかということだけを述べているだけの文である。一方で、(31A)は「私は」そのパンに対してどんなことをしたのか、どんな処置をしたかを聞き手に伝えようとしている文である。ここでさらにいくつかの例を詳しく分析することにする。

(33A) 孩子把鞋穿反了。(動態的表現→子供は靴を左右逆に履いた。)

(32B) 孩子的鞋穿反了。(静態的表現→子供が履いている靴は左右逆になっている。)

(33A) 我把杯子擦干净了。(動態的表現→私はグラスをきれいに拭いた。)

(33B) 杯子擦干净了。(静態的表現→グラスはきれいになった。)

(32B)は単に「子供の靴」が左右逆になっているという静態的な事実を述べているだけであるのに対し、(32A)は「子供」が靴に対してどんなことをしたのか、どんな処置をしたかを聞き手に伝えようとしている文である。従って、取り立てて処置を表す必要がないのであれば、“把”構文を使う必要はない。逆に、聞き手に受事主体をどう処置したいか、どう処置したのか、どのような結果を得たいのか、どのような結果になってしまったのかを伝えようとするのであれば、“把”構文を使う必要がある。いわゆる、プロトタイプの“把”構文が使われると、動作対象がどう処置されるか、動作主にどのように「支配」されるかが強調されることになる。

2.5 “把”を絶対に使用できない文

学習者はよく下記例文のような間違いをする。なぜこれらの文は“把”構文が当てはまらないのだろうか。

誤用例：

* (34) 小王把学习学得很努力。

* (35) 小王把汉语说得很流利。

* (36) 小王把歌儿唱了两个小时。

* (37) 小王把书看到第五页。

* (38) 小王把这个句子说不出来。

* (39) 小王把作业做得完。

上述したように、“把”構文の動作対象は、動作主の「支配」を受けて状況的变化が生じる部分である。“把”構文の多くは“受事者主語文”であり、動詞は結果や状態変化を伴った表現でなければならない。(34、35)の誤用例は様態補語が動詞を修飾するものであり、動作主による処置の結果や変化ではない。いわゆる「学习—学得—努力」、「汉语—说得—流利」というのは学習の様態・様子であり、結果ではないので、“把”構文が成立しないのである。

(34)の正しい文

他 学习学得很努力。(彼は勉強を頑張っている。)

大主語 大述語

学习 学得很努力。

小主語 小述語

(35)の正しい文

小王 汉语说得很流利。(王さんは中国語がうまい。)

大主語 大述語

汉语 说得很流利。

小主語 小述語

上記の正しい二つの例文は主述述語文である。「学习」や「汉语」は動作対象(目的語)ではなく、小主語であるため、これらの文では処置される動作の受け手にはならない。従って、“把”構文は上記例文のような小主語に対して処置を加えることができないのである。

* (36) 小王把歌儿唱了两个小时。

* (37) 小王把书看到第五页。

誤用例(36)は、動作対象である「歌儿」に対する処置・動作の結果が二時間となっているが、歌の長さを二時間に延ばしたわけではなく、歌を二時間歌い続けたことがその「変化」になっている。つまり、「二時間」歌い続けたことは動作対象「歌」に対する処置ではなく、動作が行われた時間・動量を表す時量補語である。従って、正しい文は、「小王唱歌唱了两个小时。(王さんは歌を二時間唄った。)」或いは、“把”構文を用いた「小王把歌儿唱完了。(王さんは歌を最後まで唄った。)」という文が正しくなる。

プロトタイプの統語構造“X 把 YVR”の構造に直した文では、「小王一唱」、「歌→完了」、という必然的結果が出るのが自然に感じられる。

誤用例(37)では、動作対象「书(本)」に対する処置の結果は「看到第五页(5ページまで読む)」になっているが、本は第5ページに変化したのではなく、「第五页(5ページ)」は「看(読む)」という動作の動量補語になる。従って、正しい文は「小王看书看到第五页。(王さんは本を5ページまで読んだ。)」或いは“把”構文を使用した「小王把书翻到第五页。(王さんは本の5ページを開いた。)」となる。後者は、5ページが開かれたという場所的变化を表現することが出来る。「5ページ」は「翻(開く)」という動作の結果になるからである。

また、“把”構文の特徴として、補語部分は必ず動作の結果や状態変化を表したものでなければならない。これは、動作の可能補語は基本的に使えないという原則があるためである(可能態は未然に属し、未然を表す。)プロトタイプの“把”構文の補語部分には、必然的にその動作によって引き起こされた結果や状態・程度を示す言葉が要求されることになる。結果・状態・程度は已然に属する。ところが、誤用例(38、39)では、補語部分は可能補語・可能態である。已然と未然が矛盾するため、“把”構文では可能補語が伴えないのである。

以上の誤用例分析を踏まえると、“把”構文が使える文は下記のようにまとめられる。

- ① 主語や小主語部分に対して処置ができない。
- ② “把”構文に使う動詞はその語彙的意味と動作対象が処置された結果との間に必然性や関連性を導くことのできるようなものでなければならない。
- ③ “把”構文は可能補語を伴えない。

3. 処置文の“把”と受動文の“被”

3.1 二つの立場からの表現

物事はどの立場から表現するかによって、伝えようとする文の形が違ってくる。中立的に物事を述べるには例文(40)のような文になるが、動作主が動作対象に何をしたか、どのように処置したかを表すには、(41)のような“把”構文を使うことになる。さらに、主語になる人物や事柄に他の動作主が加えた行為とその行為によって生じた結果、状態の変化を表現するなら、例文(42)のように“被”構文、つまり受動文の表現を用いて述べることになる。

物事に対する表現意図は、少なくとも“把”構文と“被”構文の二つの立場から表現することができよう。処置の対

象を“把”で導く処置文と、事態を引き起こす側である動作の行為者を“被、叫、让、给”で導く受動文とは、文法的、意味的に表裏の関係にある。意味的に言えば、“把”構文と“被”構文は共に、ある主体がある力によってある変化を引き起こしたということを表す。しかし、“被”構文の「ある力」というのは「外的力」であるのに対し、“把”構文の「ある力」というのは「内的力」である(張黎、佐藤 1999: 253-255)。さらに、この二つの立場に加えて、中立的な立場を表す表現もある。

“把”構文: 動作主 + 把 + 動作対象+ V. +R (結果、状態・場所的变化など)

妹妹 把 电脑 弄坏了。 (妹はパソコンを壊してしまった。)



“被”構文: 動作対象+ 被 + 動作主+V. +R (結果、状態・場所的变化など)

电脑 被 妹妹 弄坏了。 (パソコンは妹に壊されてしまった。)

(40) 弟弟拿走了我的游戏机。(中立的表現: 弟が私のファミコンを持っていった。)

(41) 弟弟把我的游戏机拿走了。(動作対象への処置表現: 弟が私のファミコンを持って行ってしまった。)

(42) 我的游戏机被弟弟拿走了。(主語である受動者が動作主を導く表現: 私のファミコンは弟に持って行かれてしまった。)

“把”構文の目的語は述語動詞の受け手に当たるが、“被”構文、いわゆる受身文の目的語は動作主を示している。すなわち、“被”の働きは受ける行為の動作主を導くことにある。例文のように、プロトタイプである典型的な“把”構文と“被”構文は、同じ述語動詞を根幹のところでも共有しながら、出来事の参加者である「動作主」と「動作の受け手」の順序を並べ替えることができる。ただし、複雑な文になると、単純な書き換えは成立しなくなる。

3.2 “把”と“被”の使用頻度

現代中国語では、“被”構文は“把”構文ほど頻繁に使われていない(松岡、古川 2008: p.365)。その理由は二つある。

第一に、中国語の受身表現は必ずしも“被”を用いなければならないというわけではないからである。例(42)のように受け手をそのまま主語にすることができるし、また動作主が文中に現れる場合でも、例(44、45)のように、“被”を用いないで表現することができる。

(43) 大树倒了。(大きな木が倒れた。)

(44) 风吹倒了大树。(風が大きな木を倒した。)

(45) 大树是风吹倒的。(大きな木は風に倒された。)

第二に、歴史的に見て、“被”で表されている受動文は受動者にとって、不如意な出来事や望ましくない出来事、不愉快な事態を表すものであったからである。ただし、現在中国語では、例(46-48)のように、このような意味上の制限も薄まりつつある。

(46) 他被上司夸奖了一番。(彼は上司に褒められた。)

(47) 我被调到上级机关担任管理职务了。(私は上の部門に転勤させられ、管理職になった。)

(48) 她被评选为「感动中国十大杰出人物」。(彼女は中国を感動させたトップテンの一人として選ばれた。)

しかし、このような傾向はあるものの、受動文は本来の不愉快な事態を表すものとしての性格が多少なりとも残っている。“被”構文は、「BがAのせいで、被害や迷惑を被ってしまう結果になる。」という意味を表す場合に最もよく活きてくる。下記の例(49)、(50)は一種の自然現象による受身表現と言われ、例(51)のように、物事をとらえる視点や表現の技法には欧化語法的な特徴をもつものが多いと言える。

- (49) 她被大雨浇得浑身都湿透了。(彼女は大雨でずぶ濡れになってしまった。)
- (50) 整个村庄都被洪水淹没了。(村全体が洪水で沈んでしまった。)
- (51) 学生们被就职的沉重压力压得甚至没心思学习了。(学生たちは就職という重いプレッシャーのために、勉強する気力さえなくなった。)

上記例文に見られるように、芳しくない事態を引き起こす側を導くには、“被”構文が最も適している。このように中国語受動文の用法では不如意な「感情色彩（感情表現）」に関わる意味論的制約が主なものであると言ってよい。

“被”以外にも、受動者が主語で、動作主を導く前置詞には、“叫、让、给”がある。“被”は主に書き言葉に用いられ、“叫、让”は主に口語で用いられている。“让”には若干教養が感じられるという側面があるようである。また、公式の場や演説などで“叫、让、给”は一般的に使われることはない。

4. “把”構文に関する学生の習得状況

4.1 変化の結果やその状態を表す表現の欠落傾向

筆者は、2010年6～7月まで、学習者の“把”構文に対する学習とその効果を把握するために調査を行った。本学の中国語中級学習レベルに当たる中国語Ⅳと中国語Ⅲのクラス（表4-1参照）にて、“把”構文の練習問題を行わせた（付加資料参照）。そして学生の誤った回答から、学生にとって間違いやすいパターンを分析し、さらに、間違いがそれぞれのパターンに占める割合を算出した。今回の調査が今後の“把”構文の教授や学習者の習得に役に立てばと願っている。

表4-1 “把”構文の習得状況データを得たクラスと回答者数

学習レベル	授業頻度	1コマの授業時間	学期数	学習週間数	回答者数
中国語Ⅳ	週4回	約90分	全4学期	13週×4学期=52週間	14名
中国語Ⅲ	週4回	約90分	全3学期	13週×3学期=39週間	12名

上記2クラスは本学の中国語中級レベル（学習週間数39～52週間、毎週の授業時間は6時間）に当たるクラスであり、筆者が担当している。まず、中国語Ⅳのクラスでデータの収集を行った。このクラスは本学における中国語の最上級クラスである。“把”構文の学習は中国語Ⅱから始め、全4学期の学習期間を経て、中国語の特徴的な文法の一つとして紹介されてきた。今回のような習得状況や学習効果に関しての調査は初めてと言えよう。

筆者はまず中国語Ⅳのクラスで復習として、簡単に“把”構文を説明した後、学生に資料の練習問題を行わせた。その後、中国語Ⅲのクラスで“把”構文の定義や構造、プロトタイプの認知モデル、用いる際の注意点などを詳細に、繰り返し説明した後、中国語Ⅳと同様の練習問題を行った。中国語ⅣはⅢより3ヶ月ほど学習時間が長く、処置文などの文法応用能力はⅢより上達していると思われるため、詳細な復習説明を経れば、中国語Ⅲに比べ、より一層の学習効果を得られるだろうと考えられる。

本調査では、教員の詳しい、系統的な説明はどれくらいの効果があるのかを検証するために、中国語Ⅲのクラスでより詳しい説明を行うことにした。その結果、表4-2のように、中国語Ⅲの学習者の間違いは中国語Ⅳの上級生よりも少なくなったという驚くべき学習成果が得られた。中国語Ⅳクラスの回答には126箇所間違いがあったのに対し、中国語Ⅲクラスでは間違いが52箇所と明らかに少なかったのである。

中国語Ⅳクラスの中で一番間違いが多かったのは、述語動詞後の結果補語、方向補語の欠落、又は使用した結果補語や方向補語の間違いであった(35%、44箇所間違い)。中国語Ⅲクラスでは、この種の間違いは幾分少なかったが、依然として“把”構文における最大の問題となっている。二番目に大きい問題としては、述語動詞がなく、直接結果補語や方向補語が使われた間違いであった(中国語Ⅳ：17%、22箇所)。

間違いの一例として例えば、例(52)：教室里很闷热,窗户全关着。老师对坐在窗户附近的同学说：(教室の中は非常

に蒸し暑く、窓は全部閉まっている。先生は窓際に座っている学生に「窓を開けてくれませんか。」と言った。*请把窗户打开吧。→ 请把窗户打开吧。)

中国語Ⅳにとって三番目に大きい問題は、助動詞や副詞（否定の“没”）を“把”の前ではなく、述語動詞の前に用いたことであった。中国語Ⅲでは、この問題は殆ど解決され、ごく数箇所の間違いしか見られなくなった。

しかし、中国語Ⅳの学生は中国語Ⅲの学生より3ヶ月ほど長い学習期間があるため、当然ながらⅢの学生より間違いが少なかった点もある。表4-2の影部分のデータから、中国語ⅣはⅢより動詞使用の間違いや「了」の間違いが明らかに少ないことが分かる。よって、中国語Ⅳでは総合的な学習効果が出ていることが伺える。

表4-2 中国語ⅢとⅣの“把”構文における間違いの形式と割合

間違い 形式 レベル	述語動詞後の結果補語・方向補語の欠落 又は間違い	述語動詞の 欠落	“把”構文 の過度使用	変化を表わす 「了」の欠落	目的語と 述語の位置 転倒
中国語Ⅳ (全体126)	35%(44)	17%(22)	14%(17)	6%(7)	5%(7)
中国語Ⅲ (全体52)	30%(15)	6%(3)	8%(4)	18%(9)	該当なし
間違い 形式 レベル	動詞の間違い	助動詞や副詞 の位置の間 違い	主語を述語 の後に	“把”を述語の 後に	
中国語Ⅳ	9%(11)	12%(15)	1%(1)	1%(1)	
中国語Ⅲ	26%(13)	6%(3)	4%(2)	2%(1)	

資料の練習問題に現れた間違いの数（()内の数字）と間違いの総数に占める割合

処置文と言われる“把”構文は、日本語の変化他動詞文を使い慣れた日本語を母国語とする多くの学習者にとっては、なかなか使いこなせない中国語の特徴的な文法の一つである。学習者は“把”構文の文法構造を理解しているつもりであっても、いざ文を書くと、“把”構文がもっている特徴であるプロトタイプとも言える処置後の結果や状況・性質的变化を表現する“X把YVR”の“R”の部分の間違いが多い。この問題を解決するには、教員がより一層の詳しい説明や反復的な注意喚起を行い、使用する動詞と動作の結果や動作対象の状態変化との間の必然性や因果関係を明確化することが必要だと強調することが重要である。

学習者の副詞や助動詞の位置に関する間違いは、全体の間違いの中で比較的大きな割合を占めている（4.1の表4-2参考）。副詞や助動詞の位置についてあらかじめ説明しておいたり、繰り返し強調したりすることで、このタイプの間違いは他のタイプの間違いより早く訂正できることが実験の結果から検証された。説明後は間違いを（12%から6%に）下げることができたのである。

4.2 “把”構文の過度使用と学習効果

中国国内の外国人に対する中国語教育の現場でも、学習者による“把”構文の過度使用がよく見られる。外国人学習者にとっては、動作主が動作対象に対して処置を行えるかどうか、動作、行為が動作対象に対して処置を行っているかどうか、その必然性と因果連鎖の判断が難しい。また処置後の結果・状態・性質が変化しているかどうかに対する判断も難しい。しかし、本論で述べたように、中国語Ⅲのクラスでは、“把”構文の定義や構造、プロトタイプの認知モデル、用いる際の注意点などを詳細に説明した後、中国語Ⅳと同じ練習問題を行った結果、驚くほどの学習効果が出たと言える。以下の表4-3から、中国語Ⅲにおける“把”構文の学習効果は明らかである。

表 4-3 “把”過度使用の回答例と全回答に占める間違った回答の割合

“把”構文の過度使用の例	中国語Ⅳクラス	中国語Ⅲクラス
(53) あなたはどのお店で写真を焼き増ししていますか。 *你把照片在哪家店加洗? 你在哪家店加洗照片?	6/14 (42%)	2/8 (25%)
(54) もっと大きい声で言ってください。 *请把声音再大点儿说。 请再大点儿声音说。	4/14 (29%)	1/10 (10%)
(55) 食事をきちんと取らないと元気が出ませんよ。 *不把饭好好吃, 就会没有精神。 不好好吃饭, 就会没有精神。	2/11 (18%)	全員正解
(56) 彼は「很想很想你」を一時間聞いてやっと覚えました。 *他把「很想很想你」唱了一个小时才记住了。 他唱「很想很想你」唱了一个小时才记住了。	7/12 (58%)	2/10 (20%)

上記のデータから、処置文“把”構文の特徴や使用場面について、中国語Ⅲの学習者の理解が深められたことが観察できた。筆者の教授経験も踏まえて考察すると、教員が“把”構文の特徴に対する系統的な説明方法を工夫し、また、説明や練習と訂正の回数を増やすことで、学習者は“把”構文という難関をより早く突破できるだろうと思われる。

5. おわりに—教授に関する提案

本論では最後に、学習レベル別、段階別に“把”構文の説明と練習を行うことを提案する。まず、どの学習段階で、“把”構文の指導を行えばいいのか。第二に、どのように練習すればよいか。そして、第三に、“把”構文の上達をはかるために行う応用練習問題の出し方などについて提案する。

まず、どの学習段階で、“把”構文の指導を行えばいいのかについて述べる。殆どの教科書では、“把”構文の根幹になる結果・状態変化を表す結果補語、方向補語、変化・新しい状況発生の“了”、動詞の重ね型の文法説明は、学習者が基礎的な発音や基本文法を終え、学習開始後数ヶ月経った頃だと思われる。これらの“把”構文の必要成分の勉強が終れば、“把”構文の教授は、教科書に“把”構文の例文が出ると同時に、説明と比較的簡単なプロトタイプの応用練習を行うことをお勧めしたい。

第二に、どのような練習を行えばよいかについて筆者の考えを提案する。中国語の結果補語や方向補語の中でよく使用されるものは、「学好、打开、关上、还给、送给、交给、放在、拿回、带进、写在、记住、翻译成」などである。これらの結果補語や方向補語は、殆どの場合“把”構文の中で使用される。「学好、打开、送给、放在、拿回、记住、翻译成」などの動詞と結果補語、方向補語が結合した単語を用いた翻訳練習を行い、プロトタイプの統語構造“X 把 Y VR”、のVR部分は上記の単語を使うように指示し、“把”構文を使う言語シーンを記憶させるとよいだろう。慣れさせる最初の段階として、例えば「请把电子辞典借给我用用, 好吗?(电子辞書を貸して頂けますか。)」, 「请你把那本书拿给我, 行不行?(あの本を持ってきてくれませんか。)」のような、簡単なプロトタイプの“把”構文を練習することが大切だと思われる。

このような場合は学習者、とくに初中級の学習者に説明し、様々な場面の応用例を用いて繰り返し練習や暗記をさせ、慣れさせることが重要だと考えられる。例えば、教室用語でよく使われている下記の文を翻訳練習させたり、暗記させたりすることをお勧めしたい。

(57) 请把做的句子写在黑板上。(作ったフレーズを黒板に書いて下さい。)

(58) 请把改好的卷子交给我。(添削した試験用紙を私に下さい。)

(59) 要考试了! 请把书和笔记本放进书包里。(間もなく試験が始まります! 本やノートをカバンにしまいなさい。)

“把”構文の学習は、初、中、上級の段階に分けて、学習者が使える動詞の難易度や場面の複雑さを徐々にあげていった方がいいだろう。また、上記の例のように、教員が毎回の授業で“把”構文を用いた指示を行うことで、学習者は“把”構文に慣れ、他の文や場面にも応用できるようになるだろう。

第三に、応用練習問題の出し方としては、意図的・プロトタイプの“把”構文と非意図的な(～をしてしまった)“把”構文の練習を別々に練習させる方が混乱が少なくよいと思われる。学習者の状況や学習段階に合わせて、下記3タイプの練習問題を行なうことをお勧めしたい: ①動詞と結果補語、方向補語などをヒントとして与える問題、②どの動詞とどの結果・状態変化を表す言葉が結び付くかの判断問題、③“把”構文を用いるかどうかを判断する翻訳問題。こうした練習で間違いが多く発生した部分を分析することで、それらが使用した動詞の間違いなのか、それとも、動詞と結果補語、方向補語、変化・新事態発生を表す“了”との必然性の間違いなのかを知ることができる。

教員が練習問題に現われる間違いに対し分析を踏まえ、説明や訂正を重ねることで、学習者は徐々に“把”構文に習熟することができるようになるだろう。そして、動詞の難易度や場面の複雑さをあげ、非意図的な“把”構文の練習も行い、初中級から上級へと上達させ、そこで、さらに間違いを分析し、引き続き説明や訂正を行うことで、徐々に間違いを減らすことができるだろう。筆者は、教員と学習者が、段階別に問題を解決し、練習を重ねるうちに、共に上達を実感でき、この文法を使う自信を手に入れられると考えている。

参考文献

朱徳熙著 (1995) 『文法講義』 白帝社 (杉村博文、木村英樹訳)

奥水優 (1985) 『中国語の語法の話』 光生館

杉村博文 (1994) 『中国語文法教室』 大修館書店

大河内康憲 (1997) 『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版社

奥水優、島田亜実 (2009) 『中国語わかる文法』 大修館書店

アン・Y・ハシモト著、中川正之、木村英樹訳 (1976) 『中国語の文法構造』 白帝社

杉村博文 (1997) 「遭遇と達成—中国語被動文の感情的色彩」、『日本語と中国語の対照研究論文集』 くろしお出版社

古川裕 (2004) 「現代漢語感受謂語句的句法特点」 『第七届国際漢語教学討論会論文選』 北京大学出版社

古川裕 (2008) 「“把”構文と“被”構文: 動的なデキゴト」 『中国語の文法スーパーマニュアル』 アルク

古川裕 (2009) 『新感覚! イメージでスッキリわかる中国語文法』 アルク

呉平 (2010) 「“把”字句の事件語意分析」 『漢語と漢語教学研究』 東方書店

王占華 (2010) 「事件結構与叙事起点的句法整合—論建立以“必把句”的“把”字句教学模式的理論依拠」 『漢語と漢語教学研究』 東方書店

小川郁夫 (2000) 『中国語文法・完全マニュアル』 白帝社

張黎、佐藤晴彦 (1999) 『中国語表現文法』 東方書店

松岡栄志、古川裕訳 (2004) 『現代中国語総説—北京大学語言文学系現代漢語教研室編』 三省堂

太田栄治 (2006) 『言語研究の射程—湯川恭敏先生記念論集』 ひつじ書房

姚艷玲 (2007) 「日中両言語の変化他動詞文のカテゴリ一化に関する考査」 『日中対照言語学研究論文集』 和泉書院

汪燕 (2000) 「“把”字句練習設計中の語境問題」 『中国对外漢語教学学会第七次學術討論会論文集』 華語教学出版社

崔永華 (2005) 「關於对外漢語教学語法体系的思考」 『对外漢語教学的教学研究』 外語教学与研究出版社

趙金銘 (2005) 「外国人語法偏誤句子的等級序列」 『漢語と对外漢語研究文録』 外語教学与研究出版社

張起旺（2001）『日本人が間違えやすい中国語』国書刊行会

来思平、相原茂（1993）『日本人の中国語 誤用例 54 例』東方書店

資料（中国語Ⅳ、中国語Ⅲクラスでの“把”構文の練習問題）

一.“把”を用いて下記問題に答えなさい。

1. 你今天忘了带词典，你看着旁边同学的词典，你说：
2. 你就要毕业去其他城市工作了。你的自行车搬家时就不想要了。你怎么办？
3. 刚才买的咖啡放在桌子上还没喝呢，却不见了。你问旁边的同学：
4. 你告诉你的同屋，电视的声音太大，请他：
5. 教室里很闷热，窗户全关着。老师对坐在窗户附近的同学说：
6. 夜已经深了，妈妈看看满地的玩具，对女儿说：
7. 你在机场办好了登机手续后去洗手间，然后进了安检，却发现护照不见了。
你想起护照刚才放在洗手间的台子上了。你对安检的警官说：
8. 周末请朋友来家里吃饭，可是家里很长时间没有好好打扫了。垃圾也一大堆了，你看着垃圾自言自语地说：
9. 妹妹不小心打翻了咖啡弄了姐姐一身。回家后妈妈问姐姐衣服上的咖啡是怎么回事。姐姐坦白地说：
10. 刚买来的新小说却不知道被谁弄湿了放在窗台上晾着，你生气地问道：

二.“把”構文を使うかどうかを判断し、下記日本語を中国語に訳しなさい。

1. 車をどこに止めますか。
2. あの本をまだ図書館に返していません。
3. あのことをまだ考えていません。
4. 鍵をもって来ていますか。
5. 母親は泣いている子供を抱き上げた。
6. あなたはどのお店で写真を焼き増ししていますか。
7. 彼に私の携帯番号を知らせたくないのです。
8. 子供は靴を反対に履いた。
9. 中国語の歌を一曲くらいはちゃんと歌いたいです。
10. 試験の時は、携帯電話の電源を切ってください。
11. もっと大きい声で言ってください。
12. 食事をきちんと取らないと元気が出ませんよ。
13. 父の日に、このネクタイを父にプレゼントしようと思っています。
14. 「先生に質問する」という中国語の発音を「先生にキスする」という発音にしないでください。
15. 彼は「很想很想你」を一時間聞いてやっと覚えました。